

女子部中等科1・2・3年

「指導のねらいと実際」

佐々木 順子

I. はじめに

自由学園では4年に一度、学外のホールで音楽会を行っている。優れた作品に精一杯取り組み、聴いてくださる方々に「伝えよう」と努力することで、生徒たちが音楽的にも人間的にも成長することに期待しているからである。

女子部中等科では、一年生から三年生までが全員で合唱する形態を取っている。各学年の理解度の違いがあったり、歌うことが好きな人が多い学年と、そうでもない学年があるなどの特徴がある。だが、だからこそ、合唱ではその特性が混じり合って新しいものが生まれる可能性が大きい。同じ空間に身を置いて、誰もが持っている“声”を活かしながら、一人では決してできない音楽を仲間とともに体験しようとするところに、音楽会のねらいがある。

II. 選曲とそのねらい

音楽会のために選んだ曲は次の二曲である。

- ・Ave Maria Z.コダーイ作曲
無伴奏、三声
歌詞：ラテン語
- ・スターキャロル J.ラッター作詞作曲
ピアノ伴奏（一部無伴奏）
三声
歌詞：日本語訳（原曲は英語）

今回の音楽会では、「祈り」を全体のテーマとした。選曲に当たっては、①音楽会のテーマに沿っていること、②全体の中で「女子部中等科」としてふさわしい曲であること、③演奏形態、演奏時間などの枠の中で、生徒たちの年代の特長である、透明感のある声を活かす曲であること、④生徒たちが興味を持ち、かつ、取り組んだ結果として、作品の深みを味わえる曲であることを考慮した。

1曲目の「Ave Maria」は無伴奏の曲である。伴奏の助け無しに歌うことは大きな挑戦であるが、一方で同じパート内の声を揃え、他のパートを聴き

合いながら曲を進めて行く醍醐味がある。

歌詞はラテン語で、生徒たちにとっては馴染みのない言語ではあったが、言葉数が少なく、発音はローマ字読みに近いので、歌えると判断した。

作曲者のZ.コダーイは20世紀に活躍したハンガリーの作曲家で、B.バルトークと共にハンガリーの民謡の研究をライフワークとした人である。西洋音楽に慣れ親しんでいる私たちの耳には多少違和感のある響きだったかもしれないが、素朴で美しい小曲である。

2曲目の「スターキャロル」は、親しみやすいメロディーと美しく自然なハーモニー進行が特徴の曲である。作曲者のJ.ラッターは、宗教合唱曲の宝庫であるイギリスの人で、今も次々に新しい作品を生み出しており、日本語訳の曲も出版されている。今回は青山学院大学教授の那須輝彦氏による訳を採用した。

ピアノの伴奏に乗って気持ちよく歌えること、クリスマスを間近に控え、クリスマス本来の喜びを歌っているこの曲に取り組むことの意味を考えた選曲であった。

III. 練習の過程

(1) 授業と自主練習 練習は5月の連休後から始めた。各学年とも、音楽の時間は週に2時間ずつ組まれているが（2年生の前半期のみ1時間）、1、2学期とも大きな行事の合間を縫っての練習であった。

指導する側としては、どんな時も音楽会を視野に入れつつ曲への理解を深め、自信を持って本番に臨めるように、と心掛けた。具体的には、空き時間に教室で自主練習ができるように、各パートの音と伴奏パートをCDに録音したものを各学年に用意した。授業中にもこのCDを活用し、生徒が自主的に取り組む時間と、指導者が指導する時間を分けた。また、各パートを縦割りにして3年生に指導してもらう時間を作り、最高学年としての自覚を育むことにも努めた。

さらに高等科の2人の合唱リーダーを中心として、高等科、中等科全学年のパートリーダーに集まってもらい、パートリーダーを中心に自主練習をする時間を取ったり、音楽会に向かって皆で気持ちを一つにしていくために自分たちが励ましていく役割であることを確認した。

(2) 曲の表現に関して 「Ave Maria」を歌うに当たって、ラテン語とはどのような言語なのか、またその歴史について、歌詞の発音、意味等を理解し、内容を深めた表現をするために、前最高学部長の大貫隆先生に特別授業をしていただいた。大貫先生のわかりやすい講義によって、生徒たちにとって遠い存在だったラテン語がずっと身近に感じられるようになったようで、この授業を境にしっかりと発音して歌えるようになっていった

「スターキャロル」は歌詞が日本語であることと、伴奏付きで曲調も明るいいため、短期間にある程度水準にまで達するだろうと思ったのだが、予想に反して、形だけは歌えている状態からなかなか深まっていかなかった。そこで、生き生きと歌うためにキリストがお生まれになった時の聖書の箇所などを生徒とやり取りしながら、歌詞の情景を思い浮かべられるように方向付けを行った。

(3) 本番に向けて仕上げの段階へ 今回は指導者同士の話し合いによって、本番10日前に男子部、女子部の合唱を聴き合う時間を取った。先生方も多数聴かれる中での会は、各部の演奏もさることながら、舞台への出入りや聴く側の態度など、取り組みの真剣さを感じ合う良い機会となった。この日を境に生徒たちの気持ちが緩やかながら、一つになり始めたと感じた。

本番2日前には、初等部から最高学部までの合唱、ブラス、弦楽オケの演奏、最後の「ハレルヤ」に至るまでの全プログラムの演奏が行われ、お互いに熱心に聴き合った。また、この日の練習の後、どのような気持ちで音楽会に臨みたいかを全員に書いてもらい、それをこちらでまとめたものを配布し、皆の気持ちを分かち合えるようにした。

(4) 本番の舞台 長い期間を掛けて練習してきても、本番は1度、演奏時間は7分程度である。このたった1回に、女子部中等科生は集中力を発揮して歌いきった。多くの生徒たちが、仲間たちと自分との美しいハーモニーに包まれたことを確かに感じ

取ったことと思う。

IV. 終わりに

日本でも有数の響きの良い東京芸術劇場大ホールの舞台に立ち、日頃の練習の成果を発表できることは、生徒たちにとって様々な面で成長する大きなチャンスである。当日初めてその舞台に立った生徒たちは、ホールの大きさ、舞台の広さに圧倒され、緊張しながらも、ホールの並外れた響きの良さに気付く。本番では、今まで取り組んできたことを心に留めつつも、新たな気持ちで曲に向き合い、生徒一人一人が力を発揮し、それが女子部中等科の合唱としてまとまったことを感じ取れたのではないかと。

生徒たちは集中して歌うことで、練習を重ねてもなかなか見えなかった曲の全体像を掴み、歌の持つメッセージが聴いてくださる方に届いたことを実感したのだろう。演奏中の生徒たちの顔は、歌声と同じく輝いていた。

指導する側としては、選曲についての意図が生徒たちに伝わり切らなかったことを反省している。しかし、この音楽会は、日常の自分を越えた所で演奏する側と聴く側が共に時間を共有することを体験する貴重な機会となったことと思う。

